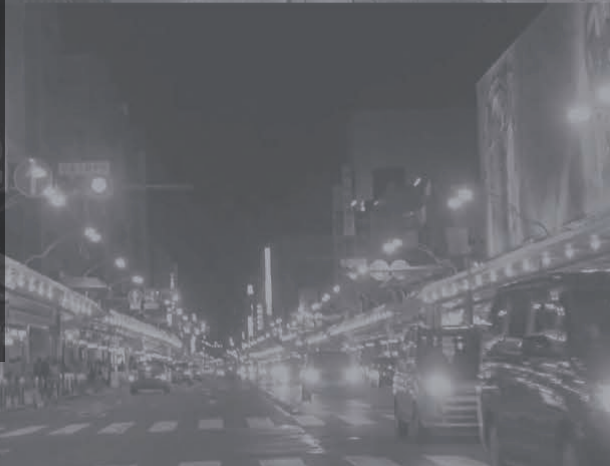




要素別の照明手法

都市の夜景をつくりだす要素はさまざま。以下8つの都市の要素に応じた照明手法について紹介。

1. 現代建築
2. 町家・神社仏閣
3. ランドマーク
4. 広場
5. 緑
6. 水辺
7. 屋外広告物
8. 道路



1. 現代建築

現代の多くのビルはガラスとコンクリートで構成される。幹線道路に沿って高層ビルが立ち並ぶことが多く、都市部の夜間景観をつくりだす大きな要素。照明手法により、ディテールを強調して昼間とは違った表情を見せたり、スカイラインの照明を統一することで品格を演出することも可能。

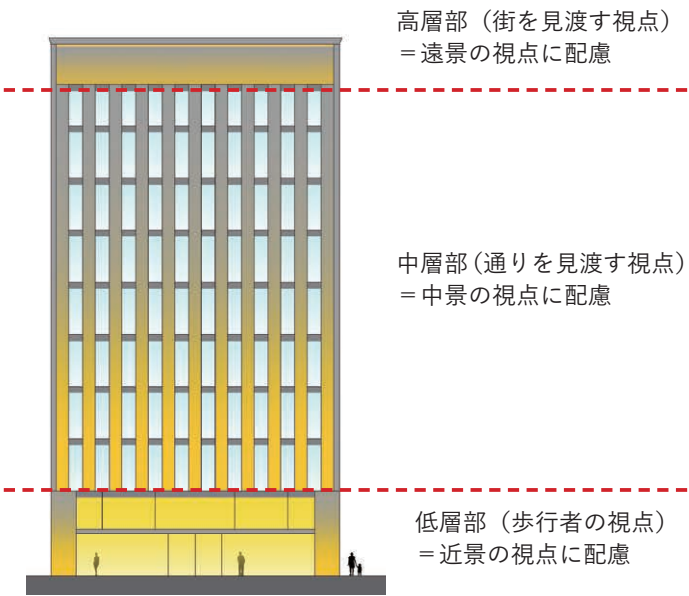
💡 現代建築の照明

夜の建物の印象は、その形や素材だけでなく照明手法と使用する灯具と光の色温度、そして周辺の光環境によって決まる。広く均一に照らす照明は建物の大きさを強調し、局部的に照らす照明は建物の細部や繊細さを強調する。

地域全体で調和がとれた夜景づくりのためには、個々の建物だけでなく周囲との関係性を意識することが重要。



手法例 | ビル外観



■高層部 (街を見渡す視点)

遠方から認識できる高層部のライトアップやサイン照明は都市夜景のスカイラインを形成する。光の色温度を揃えることで一体感のあるまち並みと洗練された都市の夜景の印象を高めることにつながる。

■中層部 (通りを見渡す視点)

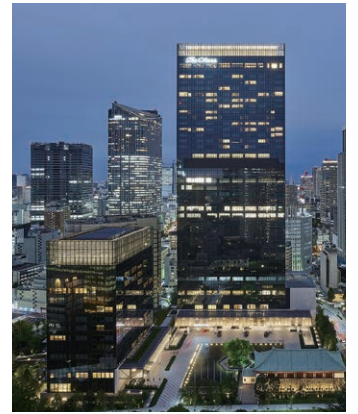
通りの景観を印象づける中層部は、ビル外壁の鉛直面への明るさが重要となる。外観を照らす際にビル室内に光が入らないように注意が必要。窓明かりも夜間の外観の見え方に影響するため、室内照明の色温度に統一感を持たせると良い。

■低層部 (歩行者の視点)

通りを行き交う人や車の視点に近い近景では、施設やビルの入口の表情が建物の印象をつくる。室内の漏れ光のほか、外壁のライトアップや発光型照明（行灯照明など）を組み合わせることで、賑わいやおもてなしを演出することが可能。



建物の輪郭をライトアップで強調した事例



頂部をライトアップで強調した事例



外壁を下からライトアップして通りに明るさ感を与えている事例



窓際の天井のライトアップが窓明かりに統一感をつくっている事例



鉛直面の明るさが賑わいをつくっているエントランスの事例



室内から漏れる拡散光がおもてなしを演出しているエントランスの事例



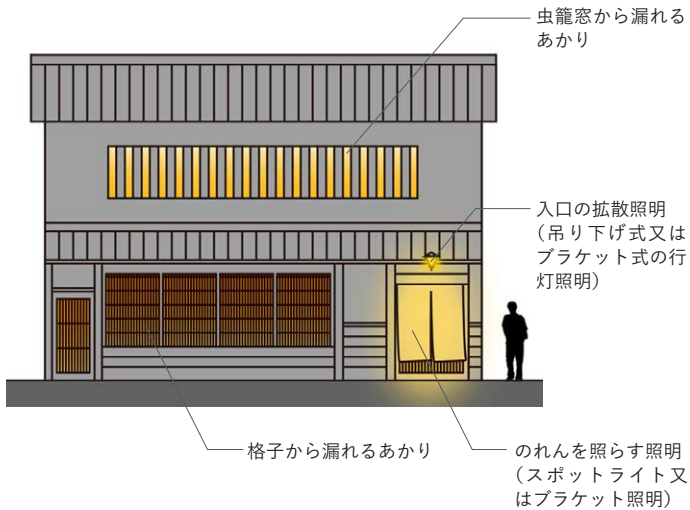
2. 町家・神社仏閣

町家や神社仏閣のような木造の日本建築には、洋風建築とは違った照明手法が必要。

日中は暗がりになる軒裏や奥まった空間や回廊にあえて光を与えることで、非日常の美しさを演出することも可能。

💡 町家の照明

手法例 | 町家建築



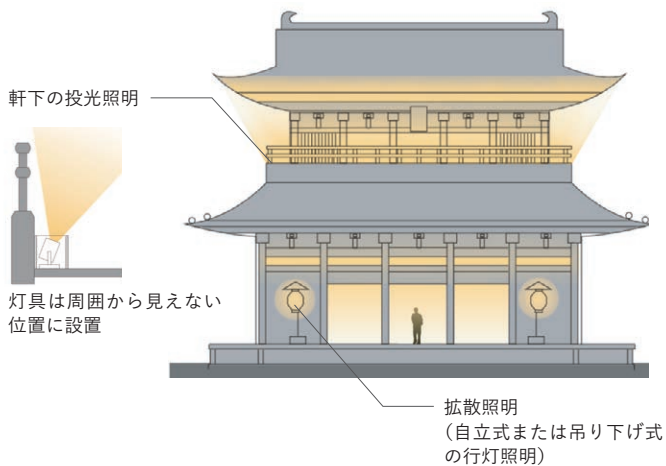
入口まわりのあかりは拡散するタイプのものにすると、柔らかく落ち着いた雰囲気をつくる。



格子から漏れるあかりは、屋内の人の気配だけでなく建物外観の美しさをつくる。

💡 神社仏閣の照明

手法例 | 神社仏閣建築



外から見えない位置に灯具を設置して軒下をライトアップすると、軒下の繊細なディテールが印象的に見える。



外観、特に入口まわりに設置する行灯照明は機能的な明るさを与えつつ、夜景の印象を高める大事な要素。



外観全体を照らすよりも特徴的な建築意匠だけを集中して照らすことで、陰影のバランスに富んだ見え方になる。

3. ランドマーク

地域に暮らす人、訪れる人の目印となるランドマーク。夜には照明を上手に用いることで見せたいものを浮かび上がらせることができる。地域の顔となるランドマークの演出次第で、賑わいや落ち着きなど地域の印象をつくりだすことが可能。



撮影：村上美都 ライトアップデザイン：高橋匡太

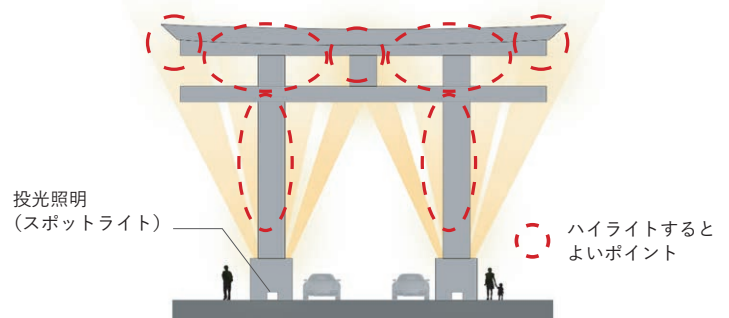
💡 近代建築・モニュメントの照明



厚みのある庇が特徴の近代建築。投光器で照らすことで重厚さが印象的に。灯具は周囲から見えない位置に設置されている。



手法例 | モニュメント



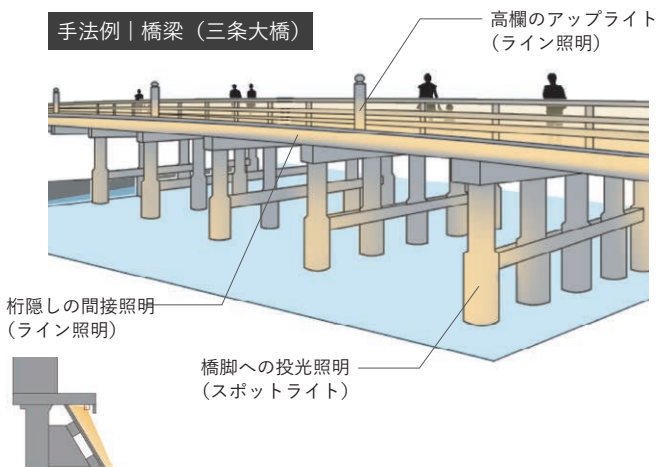
配光の狭い投光器で部位を照らし分けることで空に抜ける無駄な光を軽減できる。特徴となる朱を映えさせるように赤味のある電球色の光を使用。

💡 橋の照明



高欄と桁隠しを照らすライン照明は、歩行者から直接光源が見えないように設置されている。さらに離れた位置から橋脚に対して投光照明を行い、橋の輪郭を浮かび上がらせている。

手法例 | 橋梁 (三条大橋)



特徴的な木製の欄干（手すり）や桁隠しの意匠が照らされて見えるように外側にテープ状のライン照明を設置。橋脚は離れた位置から投光器で照らして浮かび上がらせる。車両と通行人にまぶしさを与えないように照明器具の位置や角度には注意。



4. 広場

都市における広場や公園照明のポイントは「景観を美しく魅せる光」と「憩いの場所となる光」を意識して計画すること。広場や園路では道路と違い均一に明るくする必要はなく、空間に明るさの濃淡があったほうが人の心に落ち着きを与えやすい。

💡 広場・園路の照明

手法例 | 広場・園路



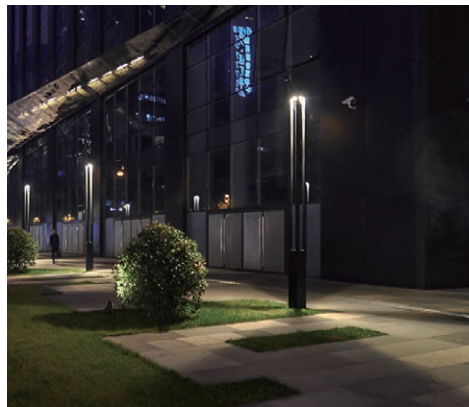
【ポール照明】

ポールの先端に灯具が付いた照明器具。一般的に公園や歩道用では高さ3～5m程度のポール照明が使われる。



① ポールスポットライト

ポールにスポットライトを設置したタイプで光が欲しい場所を的確に照らすことが可能。スポットライトが横向きに設置されていると、通行人にグレア（不快なまぶしさ）を与えてしまうのでなるべく下に向ける。



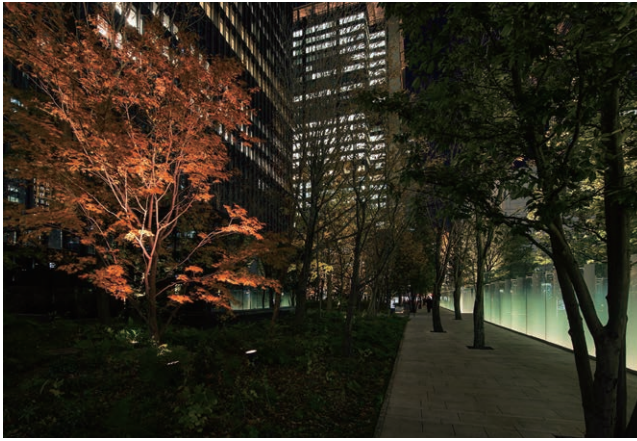
② カットオフ型のポール照明

上方向に光が出ないように設計された照明器具をカットオフ型といい、ポール照明に用いれば上空と周辺への余分な光を遮断し地面だけを照らすので環境にもやさしい。園路など広範囲を照らしたい場合に向いている。



③ 発光型のポール照明

照度を確保するだけでなく、光るポール自体がアイキャッチになる。生活の中のあかりとは異なり、都市のインフラとして整備される。明る過ぎるものは発光部分の輝度が強くてグレアになるため、適度な明るさのものを選ぶとよい。

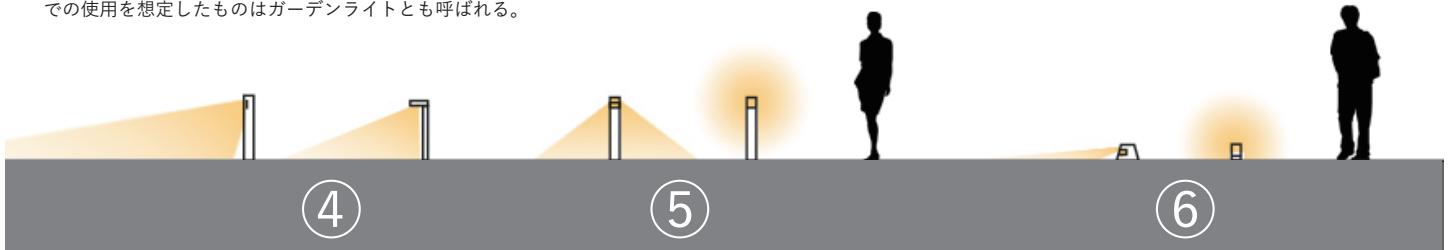


広場の照明のあり方を考えるうえでは、路面などの水平面の「照度」よりも、壁面など鉛直面の「輝度」が重要。効果的に壁面や樹木、彫刻物などのモニュメントを照らすことで、より明るさを感じる夜景がつけられる。

ベンチなど人が集まる憩いの場には、夜間も安心して過ごせる明るさがあるとよい。ベンチがある場合には、ベンチの下に照明器具を設置することで床面の明るさが確保でき、また光源が直接見えないためグレアも防げる。

【ボラード照明】

車止め（＝ボラード）と類似した形状をした屋外用の照明器具。公園や庭での使用を想定したものはガーデンライトとも呼ばれる。



④片側配光タイプのボラード照明

指向性のあるボラード照明は地面を明るく照らしたい場面に適している。光源がむき出しになっているタイプはグレアとなるため、遮光がされたものが望ましい。器具の高さは30～100センチ程度が一般的。場所のスケールに合わせてサイズを選定する。

⑤全方向照射タイプのボラード照明

全方向照射タイプのボラード照明は、器具の周辺を全体的に照らしたい場合に適している。発光タイプはグレアになりやすいため、遮光ルーバー付きを選ぶとよい。器具の高さは30～100センチ程度が一般的で、場所のスケールに合わせてサイズを選定する。

⑥全方向照射タイプの低ボラード照明

高さの低いボラード照明（30センチ以下）は日中に器具の存在を目立たせたくない場所や、あまり明るさが必要なく足元だけを照らしたい場合に適している。